

正 信 念 仏 億 30

■道綽讚②

三不三信誨懲勤

三不三信の誨、懲懲にして、

像末法滅同悲引

像末法滅同じく悲引す。

一生造惡值弘誓

一生惡を造れども、弘誓に值ひぬれば、

至安養界証妙果

安養界に至りて妙果を証せしむといへり。

三信と三不信の教えを懇切に示し、正法・像法・末法・法滅、いつの時代においても、本願念佛の法は変わらず人々を救い続けることを明かされる。

「たとえ生涯惡をつくり続けても、阿弥陀仏は本願を信じれば、淨土に往生しこの上ないさとりを開く」と述べられた。

~~~~~

### ○「三不三信誨懲勤」

曇鸞大師『往生論註』

衆生のすべての無明の闇を破り、衆生のすべての願いを満たしてくださることをいうのである。ところが、口に名号を称え、心に念じながらも、なお無明があって、願いが満たされないのはどういうわけかといえば、それは、如実に行を修めず、名号のいわれに相応しないからである。如実に行を修めず、名号のいわれに相応しないのはどういうことであろうか。それは、如来が真如実相をさとられた自利成就の仏であるとともに、そのままが衆生をお救いくださる利他成就の仏であることを知らないことをいうのである。

また三種の不相応がある。なぜ相応しないのかというと、一つには、信心が淳くなく、あるような、ないような信であるからである。二つには、信心が一つでなく信が決定しないからである。三つには、信心が相続せず、疑いの心がまじるからである。この三つは互いに関連しあっている。信心が淳くないから決定の信がない。決定の信がないから信心が相続しない。また、信心が相続しないから決定の信が得られない。決定の信が得られないから信心が淳くないのである。そして、これらのあり方と異なっていることを〈如実に行を修め、本願に相応する〉というのである。

⇒ 三不信（不淳心・不一心・不相続心） = 不如実修行

道綽禪師『安樂集』（『七祖篇』232）

もしよく相続すればすなはちこれ一心なり。ただよく一心なれば、すなはちこれ淳心なり。この三心を具してもし生ぜずといはば、この処あることなからん。

⇒ 三信（淳心・一心・相続心） = 如実修行

三心とは三つの信心があるということではなく、信心の相を三通りの面からいわれたもの。

### ○「像末法滅同悲引」

本句は、前回「道綽決聖道難証 唯名淨土可通入」の内容として示される。

|                 | 教 | 行 | 証 |
|-----------------|---|---|---|
| 正法（釈尊滅後 500 年）  | ○ | ○ | ○ |
| 像法（その後 1000 年）  | ○ | ○ | × |
| 末法（その後 10000 年） | ○ | × | × |
| 法滅（その後）         | × | × | × |

『安樂集』第三大門（『註釈版 〈七祖篇〉』・241 頁）

一切衆生みな仏性あり。遠劫よりこのかた多仏に值ひたてまつるべし。何によりてか、いまに至るまで、なほみづから生死に輪廻して火宅を出でざる。答へていはく、大乗の聖教によるに、まことに二種の勝法を得て、もつて生死を排はざるによる。ここをもつて火宅を出でず。何者をか二となす。一にはいはく聖道、二にはいはく往生淨土なり。その聖道の一種は、今の時証しがたし。一には大聖（釈尊）を去ること遙遠なるによる。二には理は深く解は微なるによる。このゆゑに『大集月藏經』

（意）にのたまはく、「わが末法の時のうちに、億々の衆生、行を起し道を修すれども、いまだ一人として得るものあらず」と。当今は末法にして、現にこれ五濁惡世なり。ただ淨土の一門のみありて、通入すべき路なり。このゆゑに『大經』にのたまはく、「もし衆生ありて、たとひ一生惡を造れども、命終の時に臨みて、十念相続してわが名字を称せんに、もし生ぜずは正覺を取らじ」と。

⇒ 二由一証

- ① 釈尊が亡くなり、時は末法に至っている（時代）
- ② 聖道門の教理は奥深く、機の能力は微弱である（機根）・・・二由
- ※『大集經』「月藏分」の文より聖道門の難証を示される。・・・一証
- ⇒ 『觀經』下下品の文と第十八願文を合わせて造文

『教行信証』「化身土文類」（『註釈版』413）

まことに知んぬ、聖道の諸教は在世・正法のためにして、まつたく像末・法滅の時機にあらず。すでに時を失し機に乖けるなり。淨土真宗は在世・正法・像末・法滅、濁惡の群萌、齊しく悲引したまふをや。

- ⇒ 他力の念佛の教えは正法・像法・末法・法滅の機まで救う真実法

親鸞聖人『正像末和讃』

像末五濁の世となりて 釈迦の遺教かくれしむ  
弥陀の悲願ひろまりて 念佛往生さかりなり

### ○「一生造惡值弘誓 至安養界証妙果」

『安樂集』第三大門（『七祖篇』241）

たとひ一形惡を造れども、ただよく意を繋けて専精につねによく念佛すれば、一切の諸障自然に消除して、さだめて往生を得。なんぞ思量せずしてすべて去く心なきや。

⇒ 末法における下下品の惡機が第十八願の称名念佛によって往生を得ると述べられる。

※聖淨二門との対応

『教行信証』「行文類」引文

今日道場の諸衆等、恒沙曠劫よりすべて經來れり。この人身を度るに  
**值遇**しがたし。たとへば優曇華のはじめて開くがごとし。まさしくまれに淨土の教を聞くに値へり。まさしく念佛の法門の開けるに値へり。まさしく弥陀の弘誓の喚ばひたまふに値へり。

今日道場に集まつた多くの人々よ、私たちはみな、はかり知れない昔から迷いの世界をさまよってきた。今、人として生れたことを考えると、それは実に得がたいことである。このことは、たとえば、優曇華

がはじめて咲くようなものである。今まさに、聞きがたい浄土の教えを聞く縁に值うことができた。今まさに、念佛の教えが説き開かれるときに値うことができた。今まさに、阿弥陀仏の本願がお喚びになる声に値うことができた。

※ 「値」と「遇」

親鸞聖人『一念多念文意』(『註釈版』691)

遇はまうあふといふ。まうあふとまうすは、本願力を信ずるなり。

⇒ 「一生造惡值弘誓」の「値弘誓」とは「本願を信ずる」という意味

道綽禪師の教学は、初二句「道綽決聖道難証 唯明浄土可通入」と讀えられる聖淨二門判に帰結し、道綽禪師の最も重要な発揮。

【MEMO】